

民意の行方 夜明け前・長野県知事選挙を考える

茨城県議会議員 海野 隆

八月十五日に告示された長野県知事選挙は、九月一日投開票に向けて五候補者による論戦が繰り広げられた。選挙戦半ばで、各報道機関の行なった世論調査が公表され、田中康夫前知事が全世代・全地域で大きくリードしていると報じた。田中前知事を失職に追いやった県議団や前回の知事選挙で落選した副知事を応援した市町村長が前面に出た、有力対抗馬である長谷川敬子候補の追い込みが焦点だとしていた。

前回田中前知事を応援した労働組合の連合長野は、今回長谷川氏を推薦した。県議会で、知事不信任の自民党・公明党は実質的に長谷川氏を、同じく不信任に賛成した民主党・社民党は自主投票、唯一不信任に反対した共産党は田中前知事を支援した。しかし、四人に一人はまだ誰に投票するか決めておらず、全国注視の選挙となった。

私は八月十四、十五日の両日、長野県に出向き、長野県民の「民意の行方」を探ってきた。ガラス張りの知事室、行政情報センター、

不信任の舞台となった県議会、焦点の浅川ダム現地を訪ね、長野の商店街や周辺住民の意見も聞いてきた。また、告示日前夜に行なわれた新潟県境にある牟礼村で行なわれた田中前知事の車座集会にも参加してきた。

そこで見聞きしてきたのは、選挙あるいは自治の本来の姿だった。県民の視線に立つて精力的に余すところなく愚直に語りかける候補者と、動員されたのではなく自らの意志で参加し自らの言葉で候補者の政策に遠慮なく注文をつける有権者の姿があった。

有権者が示す選挙での選択は、複合的な要因から決定される。しかし、マスコミがこれだけの情報を提供する中で、今回の長野県知事選挙では、「候補者の資質と政策を見極めつつ選択する」という本来の選挙の意思表示が行われるのではないかと期待された。その時、機能不全に陥った政党や組織の決定が、果たして「民意の行方」に沿ったものであったかどうかが問われるだろう。私の目には民意の行方は明らかに映った。

実は告示日の二週間ほど前から、友人と二人、ボランティアで何か手伝いができないものか田中前知事の後援会事務所に連絡をとっていた。しかしその時点になっても選挙事務所の場所すら決まっていなかった。さらに「今回の選挙は県外の方々のボランティアに頼らず、長野県民自らの意志と力で成し遂げたい」という候補者の意向があるということもあり押しかけ的に長野入りしたのだった。

全国注視の選挙なのはなぜか。もちろん不祥事に寄らない初めての知事不信任、タレントなみに全国的知名度の高い前知事、みんなで寄って集って虐めているというような印象、政党の機能不全などマスコミの注目を集める材料がそろっていることもある。しかし、それ以上に全国の有権者が注目するのは、長野で問われた大型公共工事の見直し、ダムに寄らない治水など、「脱ダム宣言」に象徴される問題が、茨城県も含めた全国共通の問題だったからに他ならない。世論調査では長野県民のみならず全国の有権者の六割以上が「脱ダム宣言」を支持しているという。だから全国の有権者が「わがこと」のように注目して見守ったのであろう。

二〇世紀、人類は自然を自らのコントロール下に置いたと錯覚した。山や川をコンクリートで固め、海を埋め立てて陸地をつくり、化学物質や農薬をつくり続けた。洪水や飢餓や病気を救った反面、多くの生物を絶滅に追い込み、生物の多様性を失わせ、環境を破壊し、自然はやせ衰えてしまった。人々は、その復元には長い年月と困難が伴うことを知るようになる。しかし、にもかかわらず全国で相変わらず行なわれている環境破壊の公共工事は止まらない。長野県民が、地元の景気浮揚にもつながらない無駄な大型公共工事を止めることができないのかどうか、自然破壊から環境重視に大きく舵を切る選択を示すかどうか。県民のみならず全国が注視した選挙だったのである。

二〇〇二・九・二(新しいばらき新聞)